

／ 231 (4) 開戦への道／ 234 (5) 「文明と野蛮の戦争」／ 239
第19章 日露戦争と韓国併合

(1) 大韓帝国／ 242 (2) 日露戦争の性格／ 245 (3) 保護条約の強制／ 248 (4) 反日義
兵「戦争」／ 254 (5) 韓国の「廃滅」／ 258

第20章 植民地支配

(1) 「武断政治」から「文化政治」へ／ 263 (2) 同化主義と日鮮同祖論／ 267 (3) 「皇
国臣民化」政策／ 270 (4) 戦争への動員／ 274 (5) 解放と分断／ 282

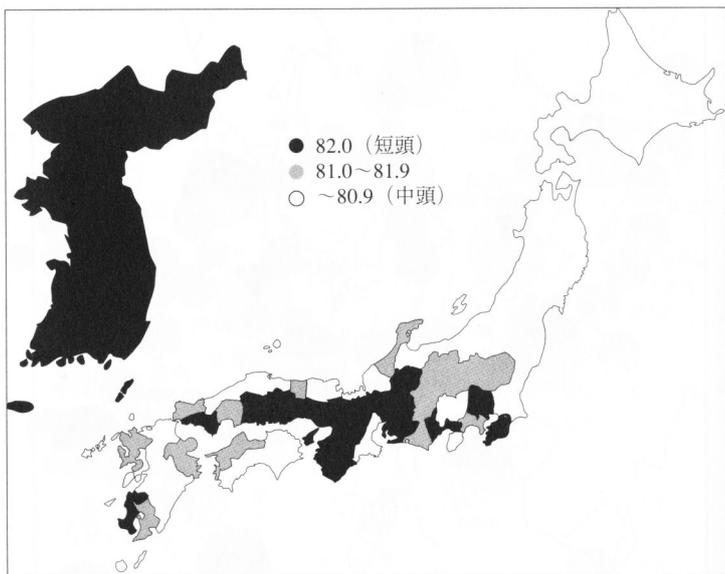
参考文献／ 286

あとがき／ 297

年表／ 305

索引／ 310

I 日本列島の原始社会と朝鮮半島



【1-1】 頭長幅示数の分布 (小浜基次;『人類学研究』7 (1960)より)

北関東・北陸・山陰から九州地方に広がっていること、前者が対馬をへて朝鮮半島の住民の特徴につながり、後者がアイヌの人びとの特徴に近似していることなどを明らかにします。そのほかの人類学的な人骨の諸形質についても同様の分布状況がみられ、さらに、沖縄など西南諸島の住民がアイヌをはじめとする周辺諸地方の人びとと共通点の多いことが指摘されました。地理的に隔たっているにもかかわらず、日本列島の北部と南部の住民がきわめてよく似ており、近畿地方など中央部の住民がそれとはおおきく異なっているという興味深い傾向がみられるのです。

近年さかんな遺伝形質やウイユイルスの研究においても、同様の結果が指摘されています。耳垢の乾湿両型の割合では、中央部に乾いた耳垢の人が高比率なのに比べて、南

日本列島を舞台にして社会や文化の歴史を創り出してきた人びと、その祖先はどこから来て、どのように、この列島に住み着くことになったのでしょうか。縄文文化や弥生文化の担い手は、その後の日本列島の住民とどのようなつながりを持ち、朝鮮半島をはじめ東アジア諸地域の文化を生み出した人びとといかなる関係にあったのでしょうか。

この「日本人」のなりたちをさぐる手がかりのひとつとされてきたのが、列島各地域の住民がもっている人類学的な特徴です。頭長幅示数の分布についてみれば、すでに明治期から大正期の調査により、近畿地方の住民が短頭（上から見た頭のかたちが円形にちかい）の特徴をしめすのに対して、東日本など他地方の人たちが長頭（前後に長い楕円形となる）の傾向をもつことが指摘されました。第二次大戦後の全国的な計測調査にもとづいた小浜基次の研究は、短頭の特徴が中央部の近畿や瀬戸内地方を典型として東海から関東の一部におよび、長頭の傾向がそれを取り囲むように周辺の東北・

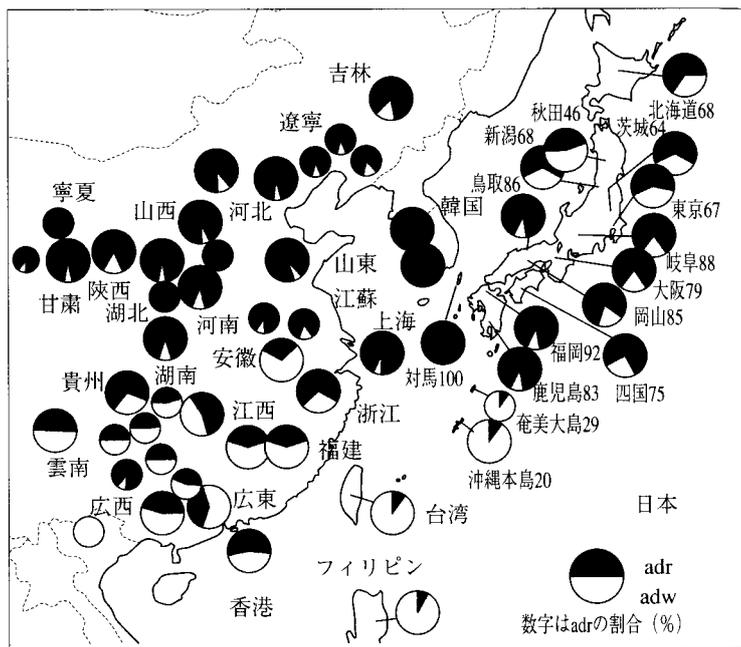
第

1

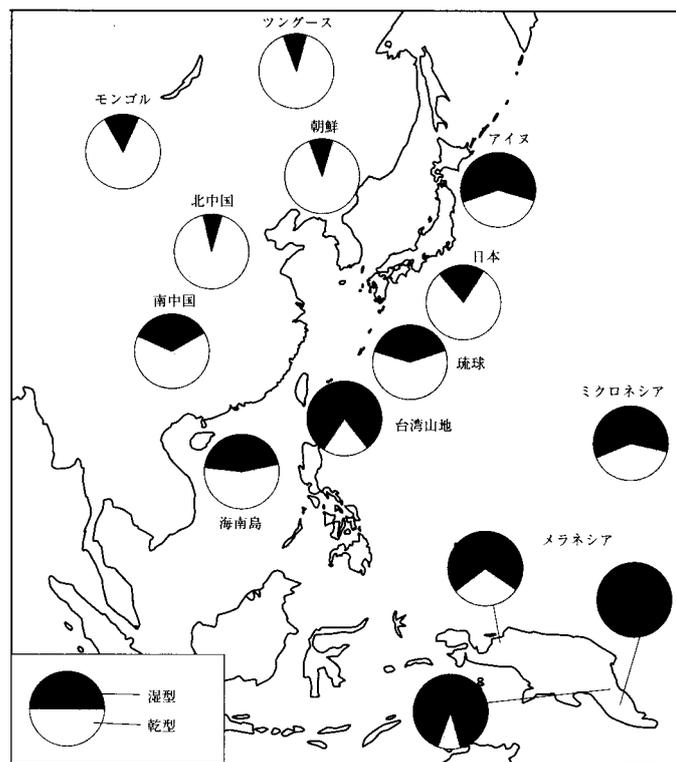
章

日本列島の住民

(1) 南方的要素と北方的要素



[1-3] B型肝炎ウイルスの抗原型の分布 (西岡久寿弥;『日本学士院紀要』38-1(1982)および佐々木高明『日本史誕生』より作成)



[1-2] 耳垢型の分布 (尾本恵市ほか『体から日本人の起源をさぐる』(1986)より)

北部では湿った耳垢の割合が高まります。また、B型肝炎ウイルスの抗原型の分布においても、adr型が高率な中央部に對して、南北ではadw型の割合が高めに出現します。しかも、視野をアジア的な規模にひろげて観察すると、日本列島の南北周辺部にみられる特徴は、中国南部から東南アジアに居住している人びとにきわめてよく似ており、一方、中央部にあらわれる特徴は、朝鮮半島や中国北部など北アジア方面に連なる傾向と一

致しています。

アジア大陸におけるモンゴロイド(黄色人種)は北方系と南方系の二タイプに分けることができ、日本列島の中央部に北モンゴロイドと共通の特質がみられ、周辺部の諸地域に南モンゴロイド的な要素がよくみられるというわけです。この事実をどのように解釈するのか、それが第一の問題となります。

北アジアでも古い地層から見つかる人骨は、今の南アジアに住む人びとの性質ときわめてよく似ています。かつては北方にまで南モンゴロイドと同様の人が居住していたことを示しており、ある時点から北モンゴロイドが住み着くよ

うになったことがわかります。このモンゴロイドの二類型については、南モンゴロイドが本来のもの、すなわち古モンゴロイドといふべきもので、あとから進化してつくられた新モンゴロイドが、現在の北モンゴロイドにつながるのだという見解が有力です。

もともとアジア一帯には古モンゴロイドがひろがっていたのですが、二万年ほど前からのヴェルム氷期の最盛期、東部シベリアにとり残されながら厳しい寒さの中を生き延びた一団が存在し、彼らが寒冷な気候に適するような身体的形質を獲得して、新たなモンゴロイドに変化します。そして、いまから一万年前、氷期が終わって完新世になり気温が上昇すると、一挙に勢力を拡大して南下し、古モンゴロイドをおしのけて北アジア一帯にひろがりました。古モンゴロイドは南方に、その中間の地域では両者が混合して中間的なモンゴロイドが形成される。これが、現在のモンゴロイドの分布状態を生み出したと考えられるのです。

(2) 縄文人と弥生人

以上のとおりだとすれば、かつては日本列島全体に、いまの南アジアに住む人びとと共通する性質をもった古モンゴロイドが暮らしており、あとから中央部へ割り込むかたちで、新モンゴロイドすなわち現在の北アジアの住民と性質を同じくする人びとが入りこんできたと推測することができます。そのため、列島の北と南に古モンゴロイドの要素がのこり、中央部に新モンゴロイドの特徴が強くあらわれました。もともと古モンゴロイドがひろがっていたところへ、あとから新モンゴロイドが流入

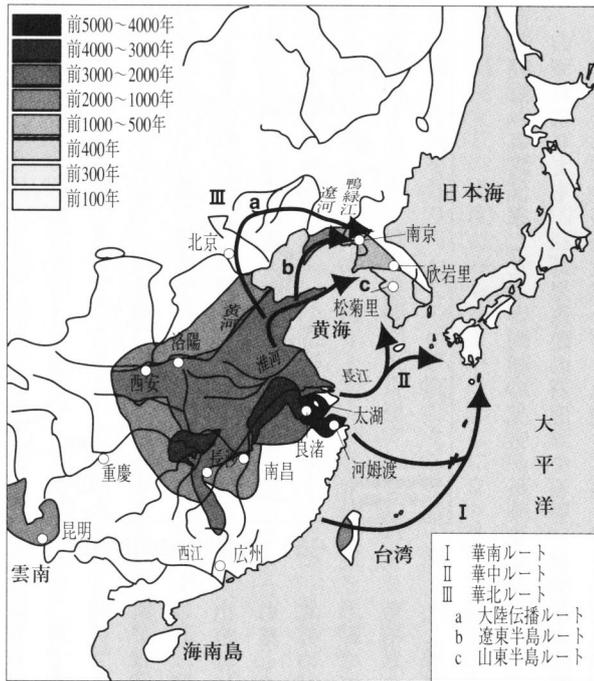
して中央部に位置をしめた結果が、日本列島住民の地域的な特徴ということになるのです。

とすれば、そうした新モンゴロイドが流入した時期は、いつだったのでしょうか。それが二番目の問題です。

縄文時代の人骨は、古モンゴロイドの特徴をつよく示しています。その前の更新世には日本列島は大陸と陸つづきでしたが、陸づたいにやってきた旧石器時代人はもちろん古モンゴロイドで、北方や南方などいくつかの渡来ルートがありました。完新世になり氷河が解けて日本列島が大陸から切り離されると、これらの人びとが新石器文化、すなわち縄文文化の担い手になったものと思われま

す。縄文時代にも周辺地域との交渉は存在しました。東日本が北方アジアとつながりの深いナラ林文化、西日本が南方系の照葉樹林文化というふうに、それぞれ特徴をもっていたともいわれ、朝鮮半島と九州北部との間には、共通の結合式釣針がみられるなど、密接な交流があったことが指摘されています。しかしながら、縄文文化の担い手がおおきく変動したような形跡はみられません。

状況が変わるのは、弥生文化が始まる時期でした。稲作と金属器に特色づけられる弥生文化は、紀元前四世紀ごろ九州北部にはじまって、西日本から東日本へ、短い期間に北海道と西南諸島を除く日本列島全域にひろまったといわれます。そして、高度な灌漑・排水の施設をそなえた水田のあとをもつ初期の弥生時代の遺跡で注目されるのが、縄文人とは著しく異なり、新モンゴロイドの特質をもつた人骨が発見されることです。土井ヶ浜遺跡（山口県）や三津永田遺跡（佐賀県）など、九州北部や中国地方の弥生初期の遺跡から発見された人骨は、それまでの縄文時代人と比べて身長が高く、短頭で、顔も上下に長く扁平な特徴をもっています。



【1-4】 稲作伝来のルート (佐々木高明；渡部忠世編『アジアの中の日本稲作文化』より作成)

そのうち南方式の支石墓が弥生初期、つまり稲作受容期の西北九州で盛んにつくられました。稲作技術をもって渡来した人びとが造ったものとみられ、この事実、稲作伝播のルートが直接には朝鮮半島からのものだったことを示しています。

朝鮮半島の原始文化は、旧石器時代のあと、新石器時代の櫛目土器文化となり、つづいて紀元前一〇〇〇年ごろには青銅器時代の無文土器文化へと推移しています。このうち、無文土器文化の担い手が、すでに新モ

きたのかということではなりません。弥生初期の遺跡に特徴的なことのひとつは、高度に完成された水田とともに、支石墓が築造されていることです。支石墓は朝鮮半島でひろくみられる遺跡で、北方式と南方式の二類型がありますが、

それでは、稲作文化をたずさえ、新モンゴロイドの形質をもたらした人びとは、どこから北部九州へやって来たのか。流入の経路が、第三の問題になります。

稲の原郷については、インド東北部のアッサムとそれに隣接した中国の雲南地方だともいわれますが、すくなくとも日本列島に伝わる稲作技術の出発点が、長江下流域の江南地方だったことは間違いないです。紀元前五〇〇〇年ごろの浙江省河姆渡遺跡からは、獣骨製の鋤先などともに大量の稲が発見されています。問題は、この江南地方から、どのように日本へ伝わったかにあります。

日本への稲作伝来のルートについては、従来より、①南方から西南諸島沿いに九州へ伝わる南方ルート、②江南地方から直接に東シナ海を越えて九州北部へ到達したとみる江南ルート、③山東半島から朝鮮半島を経由して九州北部へ伝播する朝鮮ルート、この三つの見解があります。稲そのものの伝播は、さまざまな機会に、いろいろなルートでおこなわれた可能性があり、近年の研究では縄文時代にもすでに稲が栽培されていたとする説が有力です。しかしながら、いま問題とすべきは、九州北部にはじまり、全国へひろまっていく弥生文化の基礎となった稲作が、どのようなルートで伝わって

(3) 朝鮮半島の稲作遺跡

弥生文化は、高度な稲作技術と金属器をともなった新しい人間集団そのものの渡来によって始まったものと考えてよいでしょう。これらの人びとが、北九州から中央部へ割り込むようなかたちで入りこみ、新モンゴロイドの要素をもたらしたのです。



[1-5] 朝鮮半島の稲作遺跡

ンゴロイドに属するものだったことは確かなところでは、この時代はまた、稲作がひろまった時代でもあります。忠清南道扶余郡の松菊里遺跡では、炭化米や籾痕がついた土器などが発見され、同道論山郡の麻田里遺跡や慶尚北道蔚山市の無去洞玉峴遺跡では水田遺構が発見されました。中部の京畿道驪州郡の欣岩里遺跡や北部のピョンヤン市にある南京遺跡でも炭化米がでています。歆岩里や南京の場合は畑作で栽培されていた可能性が高く、山東半島から北上して遼東半島にいたった流れが朝鮮半島北部に伝わり、さらに南下したのか、あるいは別に

南部朝鮮へ直接伝来したのか両様の見方があります。

いずれにしても、松菊里遺跡の石庖丁や石斧、銅剣などの組合せ、稲の種類は、弥生文化の最初期にあたる唐津市の菜畑遺跡などと似通っており、日本列島の稲作文化が、朝鮮の無土器文化と密接なつながりをもっていたことは疑う余地がありません。稲作の技術や支石墓、青銅器などを含め朝鮮半島で高度に完成された文化が流入したのであり、相当に大量の担い手とともに海を渡ってきたとみなければならないでしょう。朝鮮半島南端の金海郡礼安里遺跡で発掘された人骨は、対岸にあたる山口

県の土井ヶ浜遺跡の人骨ときわめてよく似た特徴を示しているのです。

(4) 渡来の波

古モンゴロイド的な縄文人の上に、新モンゴロイド的な要素をもった人たちが、朝鮮半島を経由して稲作文化を伝えたというのが、以上から推測されることがあります。最後に問題となるのは、その渡来の規模をどの程度とみるかということになります。縄文人と渡来人との融合が、弥生時代以降の日本列島の住民を作り出したのは事実だとしても、縄文人と縄文文化を根幹として渡来の要素が加わったと理解するのか、渡来集団が大規模で、むしろそれが本流となって縄文人や縄文文化を吸収したという方が実態に近いのか。渡来した人びとが縄文人を圧倒していったとみるのか、在来の縄文人が稲作文化を学び取り入れていった側面を重視するのか、見解が分かれるところです。

明治時代以来の人類学では、石器文化の担い手をコロポックルとする(坪井正五郎)にせよアイヌとする(小金井良精)にせよ、現在につながる日本人の祖先は外部からやってきて、それに取って代ったとする人種交替説が有力でした。縄文時代人が日本人の直接の祖先だとする原日本人説が有力となるのは、大正から昭和期に入って、日本人や日本文化の形成を早期に設定し、その一貫性を強調しようとする風潮のもとでのことだったといえるでしょう。その大枠のなかで、弥生以降の形質変化を外来要素との混血に注目して説明する(清野謙二)か、生活環境の変化による小進化を強調するか(長谷部言人)のちがいがありますが、第二次大戦後には、後者の学説がいつそう有力になりま

[1-6] 渡来の規模

弥生初期 (BC300) の人口(人)	年増加率 (%)	奈良時代(AD700)の人口(人)		
		縄文人直系子孫	渡来系子孫	合計
75,800	0.2	560,000	4,839,800	5,399,800
	0.3	1,522,485	3,877,315	
	0.4	4,138,540	1,281,260	
160,300	0.2	1,184,466	4,215,334	
	0.3	3,217,212	2,180,088	

(埴原和郎『日本人の成り立ち』より)

した(鈴木尚ら)。渡来の意義があらためて重視されるようになる(金関丈夫ら)のは、比較的あたらしいことから属します。こうしたなかで、埴原和郎の「百万人渡来説」は誓否両論の衝撃をもたらしました。埴原によると、縄文晩期の日本列島の人口は七万六千人程度。これが奈良時代には約五百四十万人になるとみられ、弥生時代のはじまりを紀元前四世紀ころと仮定すれば、千年間の人口増加率は年〇・四%をこえる計算になります。これまでの研究で報告されている世界各地の初期農耕段階の人口増加率とは桁違いの高率で、稲作農耕の開始という事情があったにしても尋常な数値でなく、自然増加とは別の要因、すなわち外部からの流入を考慮にいれなければ説明できないというわけです。かりに増加率〇・二%で計算すると、縄文晩期以来の在来系の子孫は千年間で五十六万人程度にしかありません。のこりの三百八十八万人は渡来人およびその子孫としなければならず、この期間に数十万から百万単位の渡来があったはずだということです。あるシュミレーションによると、現代の日本人は全国平均で縄文系三、渡来系七の割合で双方の遺伝子を併せもっており、西日本ではさらに渡来系の比率が高いといわれます。百万という数字はともかく、従来の想像をおおきく越える規模の渡来があったことは確かなことといえそうです。

ところで、北部九州の初期稲作遺跡の年代が大幅にさかのぼる可能性があるという、放射性炭素による年代測定法にもとづいた最近の調査報告は、その当否を含め、東アジアのなかでの弥生文化の位置づけをめぐる議論を活発にするものとおもわれます。それが事実ならば、九州北部はいっそう早い時期から、朝鮮の無文土器文化につらなる文化圏に包摂されていたこととなります。縄文文化・縄文人と弥生文化およびその担い手とが、日本列島の中で長期にわたって併存していたといえるでしょう。そのうえで、北九州から西日本一帯への拡大がどのような契機によったのが、あらためて問題とされなければなりません。在来の縄文人が時間をかけて稲作文化を摂取した可能性がより重視されることになるのか、あるいは第二第三の渡来の波が想定されるのか。いずれにしても、渡来は弥生時代ばかりでなく、七世紀にいたるまでいくつかのうねりとなってつづきます。平安初期にまとめられた『新撰姓氏録』によると、畿内の千八百八十二の氏のうち明確に諸蕃(渡来系)と分類されている氏が三百二十六におよびます。歴史時代にはいつてからの渡来伝承をもつ氏族だけでも、これだけの数にのぼっているということなのです。

日本列島の住民のなりたちは、在来の縄文人と、弥生以降の渡来系の人びとの双方を視野にいれてとらえなければなりません。ただ、両者の比重がどのようなものだったかはともかく、新しい弥生文化は在来の縄文文化を圧倒し、周辺に追いやっていきました。七世紀後半に輪郭を明確にする「日本」なるものは、そうした弥生文化が造りだした領域のうえに成立することになります。したがって、縄文人や縄文文化に注目することは、弥生文化を生み出す要素のひとつを明らかにする意義をもつとともに、弥生文化とその系譜のうえに創出される「日本」を相対化する視点を与えてくれるものとな

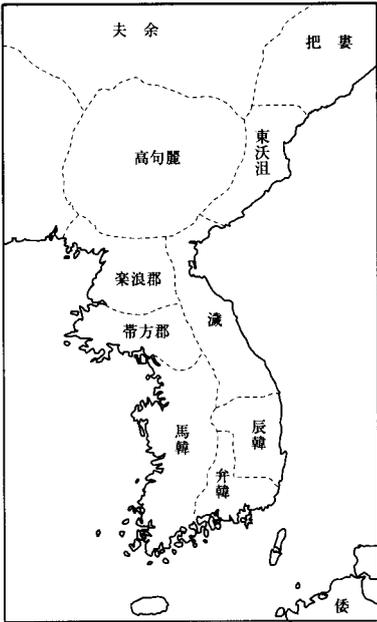
るはずで、アイヌや琉球の文化に光をあてると同時に、切り捨てられ周辺化された諸要素への着目をつうじて、「日本」を問い直す契機となるべきものでしょう。この点をあいまいにしたまま、縄文文化と「日本」を無媒介に連続させ、「日本人」や「日本文化」の起源をさかのぼらせるのが適切なこととは思えません。縄文人や縄文文化の豊かな姿を追究することは重要な課題ですが、「日本人」や「日本文化」が早くから独自のものとして成立していたことを過度に強調する文脈のなかで、「日本人」や「縄文基層文化」が語られるのはいかがなものでしょうか。慎重に検討しなければならぬ問題といえます。

第2章 金印の世界

(1) 楽浪・帯方郡と東夷諸族

農耕の発達とともに各地に集落が成長し、いくつかの集落を統率する首長があらわれます。稲作の伝播そのものが、春秋戦国時代における中国社会の動向と密接なかかわりをもつ出来事でしたが、秦や漢という強力な統一帝国が出現すると、中国皇帝が中心となつて周辺の首長らとのあいだに独自の国際的な秩序が形成されていきました。日本列島の内部におこつた国家形成の動きは、はじめからそのような東アジア世界の展開に規定されながら、朝鮮半島での同じような動きと並行・競合しつつ進行することになります。

中国の東方に位置する世界でもっとも早く国家形成のメカニズムが始動するのは、朝鮮半島の北西部を中心とした地域でした。天帝の子孫檀君が平壤城に都して建てたという檀君朝鮮や、中国から東来した聖人箕子キジがそのあとを受け継いで建国したとされる箕子朝鮮の伝説が、そのまま史実とみせないのももちろんですが、紀元前四〜三世紀にはこの地方に「朝鮮王」を称する首長が存在したこと



【2-2】 東夷諸族の居住地域

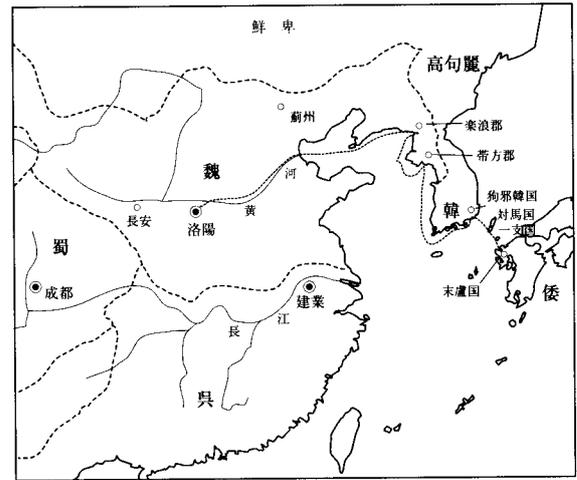
記録によると、新のときには統制に服さない高句麗王を侯に格下げする措置がとられました。後漢代になると三二一年に入朝し、ふたたび高句麗王の称号をえて、統治機構の組織化を図っています。

これに対して韓族は、馬韓・弁韓・辰韓の三つからなり、七十余の小国が分立していました。臣智・邑借などと称する首長層は、秦浪・帶方郡をつうじて邑君や邑長などの称号をえて中国

を支配下におさめます。

この魏の歴史を著した『魏志』の東夷伝には、中国東北部から朝鮮半島・日本列島にかけて居住する東夷諸族の様子が詳しく記載されています。その最後の倭人条が一般に「魏志倭人伝」（以下「倭人伝」といわれ、耶馬台国の女王卑弥呼のことが出てくるわけですが、記録されている東夷諸族の居住状況は図「2-2」のようになるでしょう。北方に夫余・高句麗、東海岸地域に挹婁・東沃沮・滅、南部に韓族、そして日本列島に倭人がおり、秦浪・帶方郡との交渉のなかで国家形成の途上にあったことがうかがえます。

高句麗は、早くから王を中心に政治的統合がすすんでおり、記録によると、新のときには統制に服



【2-1】 3世紀の東アジア

はまちがいなく、紀元前二二一年に秦が中国を統一したさい、朝鮮王の否が始皇帝に使者を送っています。紀元前二〇二年前漢が創建されたあと、中国領内から亡命した衛満は、否の子の準から国を奪って新たな王朝を建てました。これら檀君朝鮮・箕子朝鮮・衛氏朝鮮をあわせ、のちに十四世紀に始まる朝鮮王朝と区別するために「古朝鮮」とよんでいます。

衛満は漢に入朝して朝鮮王の称号をみとめられましたが、周辺地域への領土拡大をはかった前漢第七代皇帝の武帝は紀元前一〇八年、衛氏朝鮮を滅ぼしてこの地を直轄領とし、秦浪郡など四つの郡を設置しました。他の三郡は短期間で廃止・移転となりましたが、秦浪郡だけは紀元八年からの新、さらに二五十年からの後漢に引き継がれ、この地域の直接支配はの拠点として機能しつづけることとなります。後漢の末期になると、遼東の公孫氏が自立して秦浪郡を領有するとともに、その南に帶方郡を設置しました。二二〇年に後漢が滅んだあと華北を支配した魏が、二三八年に公孫氏を討って秦浪・帶方両郡



〔2-3〕 金印 左から漢委奴国王・滇王之印・広陵王璽

皇帝と君臣関係をむすび、印綬を得ていました。馬韓の月支国に治して弁辰十二国を統属したという辰王など連合の動きもうかがえますが、郡からは千にものぼる韓人に印綬が支給されていて、統一的な王権が成長するためには、かえって大きな制約となっていたようにみえます。

(2) 倭の奴国王

日本列島の状況も同様でした。「漢書」地理志によれば、紀元前一世紀の倭には、百余の小国があり、定期的に楽浪郡へ朝貢する国があったことがわかります。さらに、『後漢書』東夷伝は、紀元五七年にあたる建武中元二年に倭の奴国王が朝貢し、これに対して光武帝が印綬を与えたといっています。

このときのものと思われる金印が福岡の志賀島で発見されたのは、江戸時代も後期にあたる一七八四年のことでした。水田の畦を改修中の農民が偶然に発見して藩主のもとに提出し、現在は福岡市博物館に保管されています。一辺が二・三五センチほどの方形の印面には「漢委奴国王」の五文字がぎざまれ、つまみ(鈕)の部分は蛇の形になっています。「漢の倭の奴国王」という読み方が一般的です。

発見直後からこの金印の真偽が疑われた理由は、なによりも、漢の皇帝が内外の臣下に与えた印章のなかで、蛇鈕のものがきわめて稀だったことにあります。印章は、与えられる者の地位によって鈕の形が亀や駱駝など厳格に規定されていました。また、刻まれる文字も、「内臣」つまり皇帝の直接支配がおよぶ中国領内の王に与えられるものならば、「○○王(之)璽」となるはずであり、郡県外の

「外臣」に与えられるものは、「漢○○王(之)章」「漢○○王(之)印」などとなる規定でした。志賀島発見の金印は、そうした規格から外れており、偽造ないし私的に模造されたものではないかとの疑いが消えなかったのです。

しかし、一九五六年に中国の雲南省の古墓から発掘された「滇王之印」は、つまみが蛇の形をした金印でした。前漢の武帝が、紀元前一〇九年に下賜したのですが、蛇鈕の金印がたしかに存在することが確認されたこととなります。さらに、一九八一年には、江蘇省にある後漢代の古墓から「広陵王璽」と彫られた金印が見つかりました。これは、亀の形の鈕をもつ、内臣に与えられる規格どおりの金印で、光武帝が紀元五八年に下賜したものでした。つまり、奴国王に与えられた次の年にあたるのですが、志賀島のものと同法や重さ、文字の刻み方などがきわめて似かよっていました。同じ工房で作成されたとも考えられ、これらの発見によって二世紀にわたる真偽論争はほぼ決着がつき、志賀島の金印が本物であることが明らかになったのです。

「滇王之印」はまた、内臣と外臣の中間的な性格の印章が存在することを示唆していました。また、「奴王」で

なく、「之印」という文字をも欠いている「奴国王」の金印は、外臣のさらに外側に位置して朝貢だけをおこなう「絶域の朝貢国」、そのなかでも外臣的な要素の強い存在だったことを示すものだと、いう見解もあります。

もともと印綬の制度は、皇帝が新しい官職や爵位を与えるときに、それを示し証明するものとして官印を発給するしくみで、中国王朝内部のものでした。これを外側へ拡張し、周辺地域の首長にまで印章が支給されたのです。綬というのは印に付けられたひもで、これもランクに応じて色が決められていました。中華皇帝は天命をうけて世界の中心に君臨しており、その徳を慕って周辺の夷狄の首長らが朝貢してくるものと考えられました。それらの首長にまで官号や爵位を授与し、「外臣」として君臣関係を結び、中国の王朝秩序のなかに組み込んでしまおうとしたわけです。こうした国内・国際秩序が「冊封体制」とよばれるもので、前近代の東アジア世界を規定する原理として機能することになります。

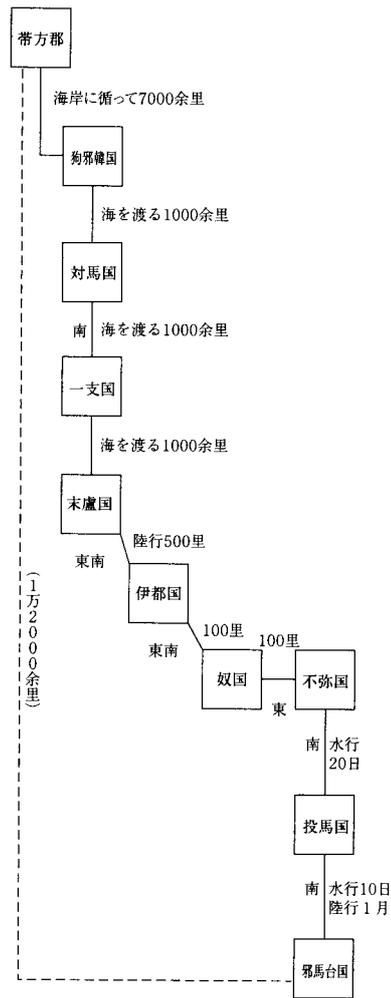
(3) 親魏倭王

奴国王のち、一〇七年に「倭国王」または「倭の面土国王」が朝貢したという記録があり、『倭人伝』によれば後漢の「桓霊の間」、すなわち桓帝・靈帝（一四七～一八九年）の時代に「倭国大乱」があつて、その戦闘の中から耶馬台国の女王卑弥呼が「共立」されたといえます。一八〇年代には、卑弥呼が三十ほどの小国を支配下に入れて、倭の王となっていたわけです。一九六一年に奈良県の東

大寺山古墳で発見された鉄刀には「中平」の年号（二八四～一八九九年）が入っていますが、もしも当時もたらされたものだとすれば、卑弥呼はすでに後漢の王朝と交渉をもっていたようにみえます。しかしながら、前述のように後漢の衰退に乘じ、遼東では公孫氏が勢力を増して楽浪郡を支配下に収め、三世紀初頭にはさらに帯方郡を設置しました。「それ以後、倭・韓はついに帯方に属す」とありますから、卑弥呼も韓の諸国とともに帯方郡を介して公孫氏に服属することになったのです。

やがて二二〇年に後漢が亡んで華北は魏が支配しましたが、中国は南方に呉、西方に蜀が並び立つ三国時代となります。公孫氏は魏に服属したものの、裏では呉と連携する動きもみせており、公孫氏の下にあった卑弥呼の立場も微妙なものだったはずですが、魏はついに二二八年、軍をおくって公孫氏を滅ぼしました。楽浪・帯方の両郡も魏の支配下にはいったのであり、間髪を入れず、翌二二九年の卑弥呼による遣使となったのです。魏の都洛陽へ使者をおくった卑弥呼に対して、皇帝は「親魏倭王」の称号を与え、金印を下賜しました。れっきとした外臣として冊封されたものと思われませんが、この称号は、他にはインドや中央アジアに勢力を張った大月氏の王に与えられただけの特別なものでした。

魏の側からすれば、南方の呉との対決にあたって、倭の動向はおおいに警戒しなければならぬものでした。しかも、『倭人伝』によれば、その位置は「会稽東冶の東に在り」とみられていたようです。会稽郡東冶の東といえば台湾の北にあたり、呉の本拠と接近したところにあつたと考えられていたこととなります。そのうえ、耶馬台国だけでも戸数八万戸の大勢力とみられていました。倭国が呉と結びつかないよう、最大限の注意を払う必要があり、「親魏倭王」という特別な称号となったの



〔2-4〕 耶馬台国に到る行程

らの国々を順次に経て耶馬台国へ到るのか見解が分かれるところでは、いずれにしても、「南至耶馬台国水行十日陸行一月」をそのまま辿れば、卑弥呼の国は九州のはるか南方海上ということになってしまいます。そこで、南の方角はそのままに距離を短縮して解釈する九州説と、距離はそのままにして方角を東に修正すべきだとする畿内説が対立することになります。

皇帝の詔書や金印をもたらず使者が、卑弥呼のところまで行かなかつたとは考えられません。魏の使者は、南方の呉との対決のなか、生死をかけた戦略の一環として耶馬台国との関係構築のために派遣されてきたはずで、倭国探索の任務も当然に含まれていたとみるべきでしょう。のちに来た帯方郡の役人は、倭国内の戦闘にまで口出ししているのです。行程記事の混乱は、使者が北九州から先へ行

でしょう。魏はまた、この時期、高句麗の果敢な挑戦をうけており、韓族や濊との対立も深まっています。卑弥呼冊封ののち帯方太守弓遵は韓族との戦いで死亡しています。楽浪・帯方郡の維持のためにも、背後にある耶馬台国を優遇する必要があったのです。

一方、卑弥呼の側からすれば、「倭国大乱」の中から王となり、三十国を統合していくうえで魏の皇帝のうしろだてが大きな力となったはずで、しかも、狗奴国との対立がありました。卑弥呼は二四〇年に再び上表し、さらに狗奴国との対立が激化すると二四三年にも使者をおくりました。これに対して魏の皇帝は二四五年に黄幢、つまり軍旗を下賜しました。さらに二四七年には、帯方郡から役人の張政を派遣し、皇帝の詔書と黄幢をもたして狗奴国との戦闘の指揮にあたる難升米なんしょうまいに与え、「檄を為りてこれを告諭」したといえます。倭国内の戦争に深く介入したのであり、卑弥呼はこうした中国王朝との結びつきを背景に国内統合をすすめていったのでした。

(4) 九州か畿内か

ところで、耶馬台国といえは、それがどこにあったのか。九州説と畿内説との対立が思い浮かぶところでしょう。「倭人伝」の最初の部分には、耶馬台国に到る行程が記録されています。帯方郡を出発したあと海岸を水行して朝鮮半島の南岸にある狗邪韓国に至り、海を渡って对馬および壹岐を過ぎ、九州にある末盧国に上陸したあと、東南へ陸行五百里で伊都国に到るといいます。ここからの記述が、伊都国を拠点としてそれぞれ奴国・不弥国・投馬国・耶馬台国へ行く行程を示したもののなか、これ

かずに伝聞でお茶を濁したためなどでなく、耶馬台国が会稽東冶の東に位置し、日本列島が南方に伸びているとする認識と整合させるために、方角ないし距離のいずれかを改変して記述したためではなかったでしょうか。

ともあれ、このどちらをとるかで、その後の日本列島の歴史展開の理解がちがってきます。四世紀中には畿内を中心にした大和朝廷が北九州までも支配下に入れていたわけですから、九州説をとれば、耶馬台国の時代のあとで畿内勢力による九州征服があったことになり、畿内説に立てば、耶馬台国が大和朝廷の前身だった可能性がよくなります。

そもそも畿内説の出発点は、『日本書紀』が神功皇后紀の注にわざわざ『倭人伝』を引用したことにありました。大和朝廷が朝鮮諸国を服属させたという物語の主人公となっているのが神功皇后なのですが、それと卑弥呼とが同一人物であることをにおわせるのは、虚構性の強い神功皇后に実在性をもたせるための手段だったとおもわれます。しかし、それは同時に、大和朝廷が中国皇帝に臣属していたと公言することをも意味しました。江戸時代になり、新井白石が畿内説から九州説へ転じたのは、『日本書紀』の記述の絶対化を避け、『倭人伝』の考証を進めた結果でした。これに対して、本居宣長の九州説は、大和朝廷の尊厳を護るためのものといえます。「万国の元本太宗」である皇国日本が中国に朝貢して臣下の礼などとするはずがない。神功皇后の名が四方に轟いているのを利用し、九州地方の熊襲の類が勝手に名を偽って使者を送ったのだ。これが宣長の九州説だったのです。

近代にいたって、白鳥庫吉が九州説を主張したのも、宣長と同様の思惑からでした。早くからの日本文化の独自性を明らかにし、天皇を中心とした国家体制の悠久性を強調したい白鳥にとって、中国皇帝に臣従する卑弥呼を大和朝廷の歴史から排除する必要がありました。しかも、韓国併合の一九〇一年に九州説を強調する論文を発表したのは、三韓征伐の輝かしい功績をもつ神功皇后を、卑弥呼から明確に切り離しておこうとする意図と無関係ではなかったでしょう。神話のうえに、神聖な皇国の歴史を描くためには、卑弥呼を九州へ追いつく必要があったわけです。

同じ年に内藤湖南が畿内説にたつ論文を発表して、耶馬台国の位置をめぐる論争がスタートしましたが、もっぱら神話からはじまる歴史が定着すれば、耶馬台国そのものが歴史学の主要なテーマではなくなってしまう。第二次大戦ののち、皇国史観の克服が課題となったとき、『倭人伝』と卑弥呼があらためて新鮮なテーマとして浮かび上がります。今度は九州説が、大和朝廷中心の日本史を問いなおすものとして意識されることになったのです。

九州説をとれば、大和朝廷の統一以前に別の国家が存在したことを明確にすることになり、一方で畿内説をとれば、早くからの大和朝廷の統一を主張できるものの、大和朝廷が中国王朝への臣属から出発していた事実を暴き出すことになってしまいます。今日においても、神話の世界から日本史の叙述をはじめたり、大和朝廷の一貫性と自律性を強調しようとするむきには、依然として卑弥呼の存在が目障りなものであり、『倭人伝』の価値をなるべく低くみたいという事情に変わりはないもののようにおもわれます。